

# 戊辰戦争戦没者の墓石の劣化状態

渡 邊 ゆ き の\*

On the Degraded State of the *Boshin* War Gravestones

Yukino WATANABE

## 要 旨

慶応4/明治元（1868）年～2（1869）年に発生した戊辰戦争戦没者の墓は、亡くなった土地や出身地など全国に点在している。墓石は文字だけでなく形状や石材等、被葬者・建立者の様々な情報を内包しており、後世に伝えるべき重要な文化財である。戊辰戦争から150年近くが経過した今、墓石の劣化が深刻化しており、いち早く保存対策を講じる必要がある。

本稿では同時期に全国各地の異なる環境下で建立された戊辰戦争戦没者の墓石の劣化状態を調査・比較し、石造文化財の劣化傾向を明らかにすることを試みた。また、墓石の劣化状態をA～Dの4段階で評価し、墓石の劣化危険度を視覚化した。

調査の結果、石造文化財の劣化の進行には、用いられている岩石の種類と凍結破壊注意日の出現回数が影響することを確認した。

キーワード：石造文化財、墓石、劣化、戊辰戦争、戦没者

## I. はじめに

慶応4/明治元（1868）年～2（1869）年の戊辰戦争は日本が近代化する過程で発生した最大の内戦であり、日本全国から多くの犠牲者が出た。犠牲者の墓は亡くなった土地や出身地などに建立され全国に点在するが、戊辰戦争から150年近くが経過した今、劣化が深刻化している。

墓石は文字だけでなく被葬者・建立者の様々な情報を内包しており、後世に伝えるべき重要な文化財である。墓石をより長期的に伝えていくには、劣化の現状を明らかにし、墓石が失われる危険性を周知する必要がある。そのため、劣化評価による墓石劣化危険度の視覚化を試みた。調査は目視でおこない、誰でも簡単に実施することのできる手法を用いた。

これまで石造文化財の保存のための研究が数多く行われてきたが、個別の地域や限定された条件のものも多く、多地点で同時に調査された例は少ない。同時期に建立されているが条件の異なる墓石の劣化状態を比較することで、石造文化財の劣化傾向を明らかにし、今後の保存方法を講じていくのが本研究の目的である。

平成28年9月29日受理 \*文学研究科文化財史科学専攻博士前期課程 修了生

## Ⅱ. 石造文化財の劣化

石造文化財の多くは屋外にあり、過酷な環境下におかれているものも少なくない。石造文化財に用いられる岩石は一般的に強く丈夫なイメージがあるが、条件によっては数年で崩壊してしまう場合がある。石造文化財の劣化には様々な条件があるが、多くの場合①物理学的劣化②化学的劣化③生物学的劣化の3タイプの組み合わせによることが先行研究で明らかにされている<sup>1)</sup>。墓石の現状を知るため、石造文化財の主な劣化現象をまとめる。

### 1. 物理学的劣化

#### (1) 凍結破壊

岩石の凍結破壊は①寒冷度②水分供給③岩質の3つの条件が作用して引き起こる。岩石中の水分は氷点下まで冷却されると岩石内部で凍結する。凍結した水分は体積が9%膨張し、内部から岩石の表層を押し上げる。凍結した水分が気温の上昇などで融解すると、空隙に水分が侵入する。水分の凍結と融解を何度も繰り返すことで内部から圧力がかかり、岩石の剥離やひび割れを引き起こす。先行研究から、0℃を中心として±4℃の気温変化がある日は凍結破壊発生の可能性が指摘されており、凍結破壊注意日と呼ばれる<sup>2)</sup>。この現象は北海道などの寒冷地だけでなく東北から九州までの日本各地で観測されており、物理学的劣化の最も大きな要因の一つである。

#### (2) 塩類風化

岩石に含まれる塩類は水分の蒸発によって濃縮され、表層部分で結晶化する。この結晶の成長に伴って岩石内部に大きな圧力がかかり、亀裂や剥離が発生する。視覚的には粉状や針状の白い結晶で確認できるが、粉状の場合は非常に脆い状態であり、小さな衝撃で剥離や崩落を起こす危険がある。崩落後新たな岩石の面が露出すると、再び劣化現象が引き起こされる。塩類風化は主に10月頃から4月頃までの約半年以上に渡って発生し、析出物が一年中みられる場合もある。

### 2. 化学的劣化

#### (1) 酸化、還元

鉄や硫化物などが酸化すると岩石が変色し、いわゆる「やけ」という現象を引き起こす。特に硫化物の酸化は変色以外にも岩石に悪影響をきたし、劣化を促進する硫酸を生成する。また、還元作用で溶けやすくなった鉄化合物は岩石表面などに移動し酸化される。結果的に酸化・還元作用は石造文化財の変色となって現れ、岩石表面の汚損の原因となっている。

### 3. 生物学的劣化

#### (1) 地衣類、藻類等の微生物による劣化

地衣類は岩石の表面に最初に着生する微生物であり、CO<sub>2</sub>とN<sub>2</sub>を利用してわずかな凹凸部分から鉱物質の栄養素を取り入れる。地衣類の次に藻類、蘚苔類、しだ類といった順に着生し、これらから分泌される有機酸や根によって岩石の表面が土壌化される。一部の地衣類が分泌する地衣酸によって岩石表面の劣化の可能性が指摘されており、張り付いた地衣類の根の成長過程に伴う

剥落も確認されている。

また、岩石表面の風化が進むことで地衣類等の着生が増加するため、岩石の劣化度を判定する基準にもなり得ると考えられる。

## (2) 植物、昆虫などによる劣化

樹木や草花などの根の生長に伴って岩石が傾き、ひび割れが広がる可能性がある。根の生長圧力は大きな岩石が分断されるほど極めて強力である。また、ミミズなどの生物が岩石表面を通過することで混合された鉱物粒子が空気や水に触れるようになり、劣化を促進する可能性がある。

# Ⅲ. 戊辰戦争戦没者の墓石の保存

## 1. 戊辰戦争戦没者の墓所

### (1) 新政府軍戦没者の墓所

戊辰戦争は慶応4（1868）年1月から約1年半に渡って発生した内戦である。京都での鳥羽伏見戦争にはじまり明治2（1869）年の箱館戦争に至るまで、各地で多くの犠牲者を出した。

そのうち、新政府軍に属していた戦没者（戦病死者等も含む）の墓は、戊辰戦争の進行と共に随時建立されてきた。特に大きな戦闘の後は戦没者のための墓所が造営され、同地で招魂祭がおこなわれた。

招魂祭は幕末維新时期に国事に斃れた殉難者・戦没者のためにおこなわれていた弔祭であり、元来、長州藩で伝統的におこなわれていた。大規模な招魂祭は文久2（1862）年12月24日に京都東山の霊明舎でおこなわれたものが最初とされ、戊辰戦争においては、慶応4年5月に京都東山で挙行された鳥羽・伏見の戦いの戦没者と国事殉難者のための招魂祭が始まりである。戊辰戦争終結後の明治2（1869）年6月には東京九段坂上に東京招魂社が創建され、6月29日から5日間に渡って明治政府による大規模な招魂祭が執りおこなわれた。政府によって積極的に招魂祭がおこなわれた事にならない、全国の藩（のちに府県）でも招魂祭が相次いで営まれた。戦没者を祀る施設である招魂社は幕末期においては長州藩に16社のみ設置されていたが、明治元（1868）年に21社、明治2年に38社、明治3（1870）年に19社が各地に創設され、明治6（1873）年には全国で100社を超えた。新政府軍の墓所は招魂社に併設される例が多く、藩によって戦没者の出身地に営まれる場合と出身地に関係なく戦没地に営まれる場合がある。他にも軍病院などに利用されていた施設近辺に墓石が建立される場合がある。新政府軍の墓石は一つの墓所にまとめて建立されていることが多い。

各藩で設置された招魂社は明治4（1871）年の廃藩置県に伴い政府の管轄に移されたが、明治6年11月9日に大蔵省は「諸県々の内、御維新の際に当り、死を遂候者の靈魂を慰むる為、東京招魂社に倣い、招魂場取設これある向、地名〈山、或田畑を潰し、或邸地を用ゆるか〉、並、場所の広狭、且、結構の仕方等、概略取調、来る十二月迄に指出すべく候事。」と通達を出し各地の招魂場の現状を調査した。同年12月2日には招魂社の地税の免除・祭祀料と墓所の修繕費の官費支給が定められた<sup>3)</sup>。

明治7（1874）年3月17日、内務省達乙第二二号「招魂社敷地の免税、祭祀並修繕共、支給方

の件」が通達された。それに伴い招魂場の所在地・創立日・面積・祭神などの詳細をまとめた明細帳の提出が命じられた。この時官費による招魂祭が定められた招魂社はのちに官祭招魂社となり、昭和14(1939)年には護国神社と名称が変遷する。明細帳は招魂社が護国神社に改称されるまで作成されていた。

招魂社に併設された墓所は「官修墳墓」と呼ばれたが、この名称は明治7年2月15日の内務省達乙第十二号によって官費で修繕費が賄われることになった墓石を総称するものである。この通達によって墓所に監守者が置かれ、墓石が朽ちることのないよう管理や修繕等がおこなわれることとなる。明治8(1875)年4月24日には太政官達第六七号「招魂社経費並墳墓修繕費定額に関する件」が通達され、官修墳墓の修繕費は一ヶ所につき年額金6円25銭と定められた<sup>4)</sup>。

以上のように政府によって官修墳墓と定められた墓所は記録が残され、定期的に管理されていた。その後戦前まで各地の墓所は政府が管理していたが、戦後管理体制が不明瞭となり荒廃する墓所が出てきた。そして昭和36(1961)年10月3日、総理府甲第二九四号「官修墳墓の維持、管理及び祭祀について」が通達される<sup>5)</sup>。通達を抜粋すると「1.官修墳墓(昭和15年4月12日内務省訓令第5号、同第6号及び同第7号により、国庫より供進された官修墳墓修繕料をもって監守された墳墓をいう。)の敷地のうち、国有のものについては、当該官修墳墓の維持、管理及び祭祀にあたる地元市町村に無償貸付又は譲与するものとする。2.官修墳墓の敷地のうち都道府県有のものについては、都道府県がその維持、管理及び祭祀にあたるもの以外は、地元市町村に無償貸付するよう都道府県に勧奨するものとする。3.官修墳墓の維持、管理及び祭祀は、官修墳墓の存在する地元市町村が行い(都道府県がその維持、管理及び祭祀にあたるものを除く)、憲法第20条の趣旨に反しないよう宗教的色彩の伴わない方法で、その地方の実情に応じて行うよう市町村に勧奨するものとする。4.官修墳墓を、将来、公共墓地等に移し変える等、その維持及び管理に多額の経費を要する場合には、別途財源措置を講ずるものとする。」とあり、以降、官修墳墓の管理は基本的に墓所の所在地である各市町村に委ねられた。そのため現在、墓石の保存管理状態は各地で大きく異なっている。

## (2) 旧幕府軍戦没者の墓所

旧幕府軍戦没者は朝敵・賊軍という汚名によって、葬ることが固く禁じられていた<sup>6)</sup>。そのため明治元年～2年頃に建立された墓石は圧倒的に新政府軍のものが多く、旧幕府軍の墓石はほとんどみられない。遺体の多くは腐敗が進んでもそのまま放置され、鳥や野犬などの餌食となっていた。旧幕府軍の主勢力となった会津藩では多くの若い兵士が亡くなった白虎隊の悲劇があったが、この白虎隊士の遺体すらも埋葬が禁じられていた。以下、今井昭彦『反政府戦没者の慰霊』より、会津藩での戦没者の埋葬経緯をまとめる。

明治元年12月頃、亡くなった白虎隊士を哀れに思った会津若松滝沢村の吉田伊惣次の妻・左喜は人夫を雇って夜間密かに遺体を移動し、妙国寺に埋葬した。のちにこの行動は新政府軍に露見し、夫の吉田伊惣次は投獄されることとなった。埋葬された白虎隊士の遺体は新政府軍によって掘り起こされ、再び野に放置された。そこで会津藩の戦後処理を任されていた町野主水ら会津藩士は、融通寺に設置されていた新政府軍の軍務局へ白虎隊士埋葬の許可を嘆願しに向かった。十

数度の交渉の結果、新政府軍参謀の三宮耕庵は白虎隊士に限り埋葬を認めた。ただし埋葬は黙認という形で認められたため、作業は深夜に行われた。こうして白虎隊士の遺体は飯盛山に埋葬されたが、その他の旧幕府軍戦没者の遺体は依然放置されたままになっていた。新政府軍は旧幕府軍戦没者を罪人以下とみなして、城西の薬師堂川原と小田山山麓の旧罪人塚への埋葬であれば許可するとした。また、遺体の処理は被差別民におこなわせるという条件であった。これを受けて会津藩側は戦没者を寺院境内に埋葬できるよう嘆願し、最終的に阿弥陀寺と長命寺が埋葬地に設定された。阿弥陀寺では明治2年2月に埋葬が完了し、この時葬られた遺体は1281体を越えたとされている。埋葬地には「殉難之霊」と書かれた墓標が建てられ、拝殿が設置された。しかし、新政府軍は朝敵である旧幕府軍戦没者に「殉難」は不適切だとして墓標、さらに拝殿の撤去を命じた。そのため墓標は「弔死標」と書き改められた。長命寺には明治2年7月中に145体（一説では数十体とも言われる）の遺体が埋葬された。明治2年7月に旧幕府軍から新政府軍に提出された『戦死之墓所絵図』では阿弥陀寺と長命寺の他にも16ヶ所で埋葬作業が行われたことが報告されている。

このように旧幕府軍戦没者の場合個人墓が建てられることは少なく、多くは合葬墓である。合葬墓といっても必ずしも墓石が建立されるわけではなく、墓標が無いあるいは木標のために朽ちている場合も多い。例えば北海道松前町では旧幕府軍の戦没者はまとめて城下町の法華寺に合葬されていたが、元々木の墓標があったのみで朽ちてしまい、しばらくその存在が知られていなかった。現在は「旧幕府軍合葬塚」という看板が立っている。他にも新潟県新潟市では昭和60(1985)年、新潟大学医学部の創立75周年記念事業として記念館の建設工事が行われた際に地中から旧幕府軍戦没者の遺骨92体が発見された。遺骨は同年5月に新潟県護国神社内の戊辰役殉難者墓苑に改葬されたが、それまで戦没者の埋葬場所は把握されていなかった。

以上のような状況から、戊辰戦争当時の墓石がほとんど確認できないのが現状である。

## 2. 墓石の保存の現状

戊辰戦争戦没者の墓所は現在、寺院や神社・市町村・個人など様々な管理下に置かれている。一部の墓所では保存会やボランティアなどが維持活動を続けており、近年おこなわれた保存活動としては、被災した墓石の復興事業が挙げられる。平成16(2004)年10月23日に発生した新潟県中越地震では、新潟県小千谷市の船岡公園西軍墓地に建立されていたほとんどの墓石が倒れるという大きな被害があった。これを受けて地元小千谷市では「小千谷北越戊辰史跡復興支援の会」が結成され、倒壊した墓石の修理・墓所の整備がおこなわれた。墓所は宗教的な要素を含んだ施設であるため市による活動が難しく、市民有志によって復興活動がおこなわれた経緯がある。復興後は墓所の掃除にも多くの市民が集まるようになり、新しく記念碑なども建立された。

戊辰戦争から少し時代が降った明治期の墓石などは近年、保存活動が各地で進みはじめている。特に大規模なものとしては、大阪府大阪市の旧真田山陸軍墓地の活動がある。旧真田山陸軍墓地は明治4(1871)年に設立された日本で最初の陸軍墓地であり、約5300基を超える将校・下士官・兵卒・軍役夫などの墓石が建立されている。建立時期は佐賀の乱や西南戦争、日清戦争など明治期のものが多く含まれている。墓石には和泉砂岩が使用されている割合が高く、岩石の特性上劣

化が急激に進行しているものが多い。墓所は「公益財団法人真田山陸軍墓地維持会」と「NPO法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」によって管理されている。現在は墓石の保存処理などもおこなわれており、明治期の墓石の保存を考えていく上で重要な墓所である。

戊辰戦争戦没者の墓所は江戸時代から明治時代へ移り変わる混乱期に造営された場合が多く、研究も断片的であり、全国的な墓石の現状把握がおこなわれてこなかった。各墓所では保存活動が地道に続けられているが、戊辰戦争終結から150年あまり経過した今、様々な要因が元で崩壊の危機に瀕している墓石も存在している。これまで各地で行われてきた活動をふまえつつ、墓石が現在どのように劣化しているのかを全国的に把握し、改めて今後の保存対策を講じていく必要がある。

#### IV. 戊辰戦争戦没者の墓石の劣化調査

##### 1. 調査地の概要

調査対象の墓石はなるべく同時期に建立されたものにするため、戊辰戦争当時の明治元年～2年頃に建立された事が史料から確認できるものを対象とした。また、調査地は調査対象の墓石が5基以上あり、劣化状態の傾向が確認できるという点をふまえて選定した。今回取り上げる墓所は次の8か所である(表1)。

##### (1) 函館護国神社 官修墳墓

所在地：北海道函館市青柳町9-23

明治2年5月21日、箱館戦争における新政府軍戦没者223名の慰霊祭が函館大森浜でおこなわれた。その後汐見町(現在の青柳町)に招魂場を造営することとなり同年8月に竣工、官修墳墓の造営も同時におこなわれた。9月5日に戦没者300余名(一説には165名とも言われる)を祀って盛大な招魂祭が営まれ、招魂場が完成した。

大正7(1918)年に発行された『箱館戦争と大野藩』の口絵写真によると当時は藩ごとに墓域が分けられていたが、大正8(1919)年には墓所が荒廃し整備されることになる。大正9(1920)年6月には陸軍省から官修墳墓の移転改修の認可が下り、同年8月までに当時の招魂社拝殿の右側へ改葬された。なお、津藩高島孫六と森岡壮兵衛の墓は元々台町21番地の共同墓地に、齋藤順三郎と岡山藩野崎栄太郎の墓も別の墓所にあったとされるが、いずれも大正12年頃に官修墳墓へ改葬されたと考えられている。その後昭和14(1939)年の招魂社移転に伴って再び改葬されることとなり、昭和17(1942)年までに現在の位置に移転した。

調査対象とした墓石は津藩2基、福山藩16基、弘前藩18基、岡山藩1基、大野藩11基、箱館府在住隊1基、御親兵6基、水夫1基の総数56基である。

##### (2) 檜山護国神社 松之岱墓地

所在地：北海道檜山郡江差町字本町216

明治2年4月以降に亡くなった新政府軍戦没者は各地から江差会議所へ護送され、松前藩が設

表 1 戊辰戦争戦没者墓所 調査地一覧

名称	函館護国神社 官修墳墓	檜山護国神社 松ノ岱墓地	神止山招魂社	東明寺 西軍墓地
所在地	北海道函館市青柳町 9-23	北海道檜山郡江差町 字本町216	北海道松前郡松前町 字松城145	福島県会津若松市大町 2丁目7-45
被葬者	新政府	新政府	新政府	新政府
石材	安山岩	花崗岩 (上ノ国産)	凝灰岩 (松前産)	安山岩
建立年	明治2年	明治2年	明治2年	明治元年～3年
改葬年	大正9年 大正12年 昭和17年頃			
対象墓数	56	93	58	63

名称	長寿院 慶応戊辰殉国者墳墓	柏崎招魂所	船岡公園 西軍墓地	久保山墓地 官修墓地
所在地	福島県白河市本町北裏 30	新潟県柏崎市学校町 1642-1	新潟県小千谷市稲荷町 12-2	神奈川県横浜市西区 元久保町
被葬者	新政府	新政府	新政府	新政府
石材	安山岩	安山岩	凝灰岩 花崗岩 安山岩	安山岩
建立年	明治元年	明治元年	明治元年	明治元年
改葬年			明治3～4年(長州藩) 明治41年(その他)	明治7年
対象墓数	61	30	196	14

営した藩の霊所（現在の松之岱墓地）に埋葬された。また、二股口や木古内口・松前口などの戦闘で負傷した新政府軍の兵士は、江差新地町に設置された大病院へ送られた。大病院での治療の甲斐なく亡くなった兵士も同じ墓地へ埋葬された。

江差の豪商関川家の当主・関川平四郎が残した手記『明治歳次卯月軍中見聞記』には「四月二十一日 官軍方打死之人達ハ当初相撲取山江土葬いたし候 但賊築立之台場下也 万事神葬祭唯今之処にては仮埋よしに御座候 墓印檜四・五寸斗之木に相認め、死骸は桶に入、供物肴煎米神酒等」とあり、4月21日には埋葬が始まっていたことがわかる。棺桶に入れられた遺体は仮埋葬され、当初は木の墓標が建てられた。5月中旬には区画整備が終わり、5月下旬から墓石の造営工事が始まった。墓石には上ノ国塩吹村（現・北海道檜山郡上ノ国町）産の花崗岩が用いられ、9月上旬には全ての造営が完了した。完成後10月25日と28日・29日に招魂祭が営まれた<sup>7)</sup>。

調査対象とした墓石は福山藩9基、松前藩27基、徳山藩11基、長州藩18基、弘前藩3基、岡山藩16基、水戸藩6基、大野藩1基、久留米藩1基、箱館府在任隊1基の総数93基である。

### (3) 神止山招魂社

所在地：北海道松前郡松前町字松城 145

明治元年から2年に松前方面で亡くなった戦没者は一度寺院や戦没地に仮埋葬された。明治2年6月以降になると神止山中腹に招魂場が設置され、各地の遺体を回収して官修墳墓が建立された。9月末には完成し、同年11月1日～3日に慰霊祭がおこなわれている。

調査対象の墓石は松前藩52基、役夫3基、民兵4基、松前藩卒妻1基の総数60基である。

### (4) 東明寺 西軍墓地

所在地：福島県会津若松市大町2丁目7-45

西軍墓地は元々新政府軍の軍務局が置かれていた融通寺に設けられ、会津藩が降伏した明治元年9月以降から墓域の整備がはじめられた。同年11月に大垣藩が大垣戦死二十人墓を建立し、薩摩藩が仙城凱旋燈籠碑を建立、12月には肥州藩が玉垣を巡らしている。明治2年4月には墓地はほぼ完成していたとみられ、明治3年4月に長州藩が長藩戦死十五人墓を建立したことで全ての墓碑が揃った。同年9月には招魂祭が行われている。

明治15(1882)年、会津若松駅前通りに三方道路を開くため融通寺の末寺とみなされていた東明寺の移転問題が起こり、西軍墓地は東明寺の管理下に置かれることとなった。墓域内には柿や梅が植えられ、その収穫によって維持費が賄われた。昭和32(1957)年4月には山口県萩市出身の会津図書館長大村武一氏が墓所の荒廃を嘆き、山口県などの協力を得て修復工事が行われ石の玉垣や霊門が建てられた。現在は東明幼稚園内の戊辰戦役西軍墳墓史跡保存会によって管理されている。

調査対象とした墓石は土佐藩49基、佐賀藩12基、岡山藩4基、福井藩1基、館林藩1基、大垣藩1基、大阪人1基の総数69基である。他にも長州藩1基、薩摩藩1基があるが建立時期が異なるため除外した。

### (5) 長寿院慶応戊辰殉国者墳墓

所在地：福島県白河市本町北裏 30

白河口の戦いは明治元年閏4月から7月までの約100日間に渡る戦闘であるが、戊辰戦争のなかでも特に激戦といわれ、新政府軍・旧幕府軍合わせて1000人以上の戦没者が出た。5月1日の激戦の日に多くの寺院が避難する中、長寿院の住職だけは避難せず寺を守っていたため、新政府軍は戦没者の埋葬を長寿院に託したという。ここには当初薩摩藩の戦没者も埋葬されていたが、大正4(1915)年に鎮護神山に改葬された。

調査対象とした墓石は長州藩18基、土佐藩18基、大垣藩3基、佐土原藩19基、館林藩3基の総数61基である。

### (6) 柏崎招魂所

所在地：新潟県柏崎市学校町 1642-1

明治元年閏4月下旬、新政府軍は桑名藩の陣屋がある柏崎町を占領した。同町の妙行寺に本堂

を設置し、9月頃から近くの開光寺に軍病院を設置した。死者は妙行寺と開行寺そして近隣地域に埋葬され、旧納屋町の一面には59基の墓石が建立された。この旧納屋町の墓所がのちに柏崎招魂所となった<sup>8)</sup>。

柏崎市立図書館が所蔵する史料『明治二十八年一月写 明治元年戊辰之歳殉難者名簿』には柏崎招魂所の初期の墓域図が載っており、面積は346坪5勺(約1142㎡)との記述がある<sup>9)</sup>。この図から当初は藩ごとに墓域が分けられ規則的に整備されていたことがわかる。時期がはっきりしないが高鍋藩1基が本国へ、薩摩藩14基が高田官軍墓地へ改葬されており現在は44基が墓域に残っている。

招魂所は明治元年10月あるいは12月に開設されているが、明治元年4月以降の戦没者が葬られているため、明治元年には墓石の整備が始まっていた事が伺える。ただし、『諸藩戦死記録<sup>10)</sup>』を参照すると名簿中14人に木標という記述がある。13回忌の際も一部は木標だったというが、現在はすべて石の墓標になっておりいつ頃改葬されたのかは不明である<sup>11)</sup>。前掲の墓域図には木標のような絵も描かれているため<sup>12)</sup>、明治28(1895)年まで木標だった可能性も考えられる。そのため、調査対象とした墓石は30基である。

#### (7) 船岡公園西軍墓地

所在地：新潟県小千谷市稻荷町12-2

小千谷には新政府軍の本営が設置されていた関係もあり、小千谷近辺の戦闘で亡くなった戦没者以外にも、他の地域で亡くなった戦没者が多数葬られている。遺体は宿所や病院に指定されていた各寺院に埋葬され、全13藩の戦没者の墓石は7ヶ所の寺院に建立された。維新後、新政府軍の小千谷駐屯時に長州藩の御用掛を務めていた井口喜代助が、所有地一反六畝二四歩(約1666㎡)を寄付し、私財を投げうって長州藩(一部長府藩も含む)の墓石を改葬した。明治3年には作業が始まり、翌4年の10月に船岡公園への移転が完了している。

明治30(1897)年5月に行われた戊辰殉難者三十周年慰霊祭を機に、近辺に散在していた他藩の墓石も船岡公園に改葬されることとなり、明治32(1899)年に資金募集が始められた。しかし思うように資金が集まらず、明治41(1908)年4月20日に県の援助を受けてようやく着工し、5月30日に全ての工事が終了した。以上の経緯から、墓石自体は明治元～2年には建立されていたと考えられる。

小千谷市内には元々204基の墓石が存在していたが船岡公園西軍墓地に改葬された墓石は196基で、尾州藩の墓石2基は中子共同墓地に、尾州藩1基は吉蔵寺に、上田藩5基は遍了寺に残っている。調査対象とした墓石は薩摩藩93基、膳所藩9基、尾張藩11基、上田藩5基、松代藩2基、長州藩54基、長府藩19基、十津川郷3基の総数195基である。

#### (8) 久保山墓地 官修墓地

所在地：神奈川県横浜市西区元久保町

戊辰戦争では銃による負傷者が多く出たが、当時の日本の医療では銃槍を治療することが難しく海外の技術に頼らざるを得なかった。そこで日本初の外科病院である横浜軍陣病院が慶応4

(1868) 年閏4月17日、野毛山の漢学稽古所・修文館に開設され、英国公使館付医官ウィリアム・ウィリスが医師として招かれた<sup>13)</sup>。18日からすぐに薩摩藩の戦傷者7人が送られ、その後負傷者の急増に伴い英国公使館付医官シッドールが5月13日に助手として着任した。7月20日に病院は東京に移転したが10月中頃まで一部の患者は横浜に残っていた<sup>14)</sup>。

横浜軍陣病院では当時の最先端の治療が施されたが、最終的に56人が亡くなった。そのうち、長州藩と土佐藩の戦没者は野毛山の大聖院に墓石が建立された。明治7年7月に久保山に共葬墓が設けられ、現在の場所へ改葬された。長州藩の墓所は山口県によって昭和56(1981)年に整備されており、土佐藩の墓所は時期不明だが近年整備されたようである。昭和57(1982)年発行の『志士は今も生きている』では、土佐藩の墓所が現在と異なる状態で掲載されており、少なくとも昭和57年以降に整備されている。

調査対象とした墓石は長州藩7基、土佐藩7基の総数14基である。

## 2. 調査の方法

各墓所では最初に全体の調書を取り、現在確認できる墓石の総数や配置、被葬者の情報を記録した。次に墓石の全景と竿石4面の写真撮影を行い、劣化が激しい箇所については個別に写真記録をとった。

劣化状態は目視によって確認し、竿石の4面を東面・西面・南面・北面に分けてA～Dの4段階評価で記録した。評価はAが最も劣化していない状態をあらわし、Dがもっとも劣化が進行している状態をあらわしている。基準は以下のとおりである(表2)。

A：劣化が認められない。

B：表面の磨滅・変質はあるが、文字の判読ができる程度。

C：亀裂、剥離、穴などが認められる。文字の一部が判読できない程度。

D：全面的に亀裂、剥離が進行している。大きな破損がある。文字がほぼ判読できない程度。

なお、評価の際は第1章第1節で述べた劣化状態のみを確認し、地震などの外的要因によるものとみられる破損は評価せず、割れや欠けなどの状態を記録した。

## 3. 調査の結果

### (1) 函館護国神社 官修墳墓

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価12基・B評価31基・C評価11基・D評価1基、西面はA評価5基・B評価36基・C評価14基・D評価1基、南面はA評価7基・B評価32基・C評価16基・D評価1基、北面はA評価7基・B評価36基・C評価12基・D評価1基であった。用いられている岩石は函館山産の安山岩であると考えられる<sup>15)</sup>。全体的に磨滅が進んでおり、一部穴が空いたように劣化が進行しているものや亀裂、剥離が認められた。そのためB評価が最も多く、次にC評価が多い結果となった。穴の空いた墓石には高確率でワラジムシが大量に生息していた。D評価の1基は全面的に劣化が進行しており、被葬者情報が失われかけていた。

表 2 劣化評価基準表

A	劣化が認められない。			
				
B	表面の磨滅・変質はあるが、文字の判読ができる程度。			
				
C	ひび割れ、剥離、穴などが認められる。文字の一部が判読できない程度。			
				
D	全面的に劣化が進行している、大きな破損がある。大幅に文字が判読できない程度。			
				

(2) 檜山護国神社 松之岱墓地

竿石の東西南北4面を観察したが、すべての面がA評価という結果になった。用いられている岩石は北海道上ノ国産の花崗岩である<sup>16)</sup>。全体的にほとんど劣化が進行しておらず、被葬者情報

も鮮明に読み取れるものばかりであった。一部外的要因による破損がみられたため、その点については今後対策を講じる必要がある。

### (3) 神止山招魂社

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価7基・C評価49基・D評価4基、西面はA評価0基・B評価7基・C評価46基・D評価7基、南面はA評価0基・B評価6基・C評価47基・D評価7基、北面はA評価0基・B評価10基・C評価42基・D評価8基であった。用いられている岩石は松前産の凝灰岩である。劣化が急激に進行しており、C評価が最も多くみられるという結果になった。他の墓所と比べるとD評価の割合も高く、危険な状態にあるといえる。岩石表面は泡状に磨滅しており、刻まれた文字が半分以上判読できない墓石が多く認められた。凍結劣化による亀裂や剥離も数か所で見受けられた。被葬者情報がまったく読み取れないものもあり、有志の方が立てた看板によって墓石の位置を確認した。

### (4) 東明寺西軍墓地

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価49基・C評価18基・D評価0基、西面はA評価1基・B評価47基・C評価19基・D評価0基、南面はA評価0基・B評価49基・C評価17基・D評価1基、北面はA評価0基・B評価42基・C評価25基・D評価0基であった。用いられている岩石は安山岩であると考えられる。全体的に磨滅が進んでおりB評価が最も多い結果となった。一部C評価も見受けられ、亀裂や剥離の進んだ墓石が認められた。若干ではあるが、北面は他の面に比べてC評価の割合が高くなっている。

### (5) 長寿院 慶応戊辰殉国者墳墓

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価39基・C評価22基・D評価0基、西面はA評価0基・B評価27基・C評価33基・D評価1基、南面はA評価0基・B評価28基・C評価33基・D評価0基、北面はA評価0基・B評価30基・C評価31基・D評価0基であった。用いられている岩石は白河産の安山岩である。B評価と同じような割合でC評価が多く、全体的にかなり劣化が進行している。ただし、東面のみB評価の割合が他の面に比べて若干高くなっている。特に顕著な劣化は薄い層状の剥離で、多くの墓石に見受けられた。剥離のひどいものは一部の文字が読めなくなっている。

### (6) 柏崎招魂所

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価34基・C評価6基・D評価0基、西面はA評価0基・B評価33基・C評価7基・D評価0基、南面はA評価1基・B評価32基・C評価7基・D評価0基、北面はA評価0基・B評価31基・C評価9基・D評価0基であった。用いられている岩石は安山岩だと考えられる。全体的に磨滅が進んでおり、B評価が最も多い結果となった。C評価は割合が少ないがいくつか認められる。一部亀裂のあるものや、函館の墓石と同様の穴が確認でき、ここでもワラジムシが高確率で生息していた。

### (7) 船岡公園西軍墓地

墓石は凝灰岩、安山岩、花崗岩の3種類が用いられているため分けて掲載する。なお、この墓所では地震によって破損した墓石が数多くあったが、セメントで補強修理がされていた。

#### 凝灰岩

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価119基・C評価4基・D評価0基、西面はA評価0基・B評価107基・C評価16基・D評価0基、南面はA評価0基・B評価99基・C評価23基・D評価1基、北面はA評価0基・B評価117基・C評価5基・D評価1基であった。全体的に磨滅が進んでおり、一部穴のあいた墓石も見受けられた。B評価が最も多く、C評価も見受けられる結果となった。南面はC評価の割合が若干他の面に比べて高くなっている。

#### 安山岩

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価10基・C評価1基・D評価0基、西面はA評価0基・B評価11基・C評価0基・D評価0基、南面はA評価0基・B評価10基・C評価1基・D評価0基、北面はA評価0基・B評価11基・C評価0基・D評価0基であった。ほとんどがB評価という結果になり、C評価はごくわずかだった。全体的に磨滅が進むのみで大きな劣化はみられなかった。

#### 花崗岩

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価0基・B評価61基・C評価1基・D評価0基、西面はA評価0基・B評価62基・C評価0基・D評価0基、南面はA評価0基・B評価60基・C評価2基・D評価0基、北面はA評価0基・B評価60基・C評価2基・D評価0基であった。B評価がほとんどで、C評価はごくわずかしか見受けられなかった。安山岩同様、全体的に磨滅が進むのみで大きな劣化はみられなかった。

### (8) 久保山墓地 官修墓地

墓所は長州藩と土佐藩に分かれているため、別々に調査を行った。なお、いずれも関東大震災によって一部破損していると考えられる17がその点については外的要因によるものとして、劣化評価はしなかった。

#### 長州藩

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価7基・B評価0基・C評価0基・D評価0基、西面はA評価7基・B評価0基・C評価0基・D評価0基、南面はA評価5基・B評価0基・C評価2基・D評価0基、北面はA評価7基・B評価0基・C評価0基・D評価0基であった。用いられている岩石は安山岩だと考えられる。磨滅がほとんど認められなかったためA評価が最も多い結果となった。しかし、一部薄い層状に剥離している部分があったためC評価が2基のみ存在する。剥離した部分は文字が読めなくなっている。A評価が多いにも関わらず薄く剥離することによって文字の部分だけ失われる可能性があり、今後注意が必要な墓石だと感じた。

#### 土佐藩

竿石の東西南北4面を観察した結果、東面はA評価6基・B評価0基・C評価1基・D評価0

基、西面はA評価4基・B評価0基・C評価3基・D評価0基、南面はA評価7基・B評価0基・C評価0基・D評価0基、北面はA評価7基・B評価0基・C評価0基・D評価0基であった。用いられている岩石は安山岩だと考えられる。磨滅はほとんど進んでおらず、A評価が最も多い結果となった。しかし一部穴や亀裂が見受けられるためC評価もいくつか認められた。特に西面が他の面に比べるとC評価の割合が多くなっている。

#### 4. 考察

今回の調査では亀裂や剥離など、凍結劣化とみられる劣化が最も多く認められた。先行研究によれば0℃を中心として±4℃の気温差が生じる日が「凍結破壊注意日」となることが明らかにされているため<sup>17)</sup>、各墓所のある市町村における凍結破壊注意日の出現回数を調べた。データは気象庁ホームページ (<http://www.jma.go.jp/jma/>) で提供されている気象情報のうち2014年1月1日～12月31日のものを用いた。観測点は函館・江差・松前・会津若松・白河・柏崎・長岡・横浜となっているが、船岡公園西軍墓地の所在する小千谷市には気象観測所が無いため近隣地点の長岡のものを使用した。結果は、2014年の凍結破壊注意日は函館で6回、江差で3回、松前で4回、会津若松で5回、白河で23回、柏崎で4回、長岡で2回、横浜で0回であった。この数値を見ると白河の出現回数が最も多くなっている。「凍結－融解サイクルの全国分布」では関東北部が最も出現回数が多くなると言及されているが、福島県白河市は関東北部に隣接する地域であり先行研究と同様の傾向を確認した。これに対して横浜は出現回数が0回となっており、冬期は比較的安定した気温変化であると考えられる。

これをふまえて用いられている岩石ごとに調査結果を見ていく。まず、安山岩が用いられている墓所では白河が最もC評価の割合が高く、劣化が著しく進行している。函館でもC評価が多く見受けられる。小千谷ではB評価が多く、磨滅は進んでいるものの重篤な劣化に至っているものは少ない。最も劣化が進行していなかったのは横浜であり、A評価の割合が高くなっている。凍結破壊注意日が23回も出現していた白河の墓石が最も劣化が進行していることがわかる。対して出現回数が0回の横浜は最も劣化が進行していなかった。この結果から、凍結破壊注意日の出現回数によって石造文化財の劣化進行度が左右される可能性が考えられる。

次に、花崗岩が用いられている墓所では江差が全てA評価で最も劣化が進行しておらず、小千谷ではB評価が多く磨滅の進行がみられる。いずれも凍結破壊注意日に関しては類似した結果が出ているが小千谷は冬期の積雪量が多く、特別豪雪地帯に指定されている。積雪が多い地域では融雪期に水分の供給量が増加するため凍結劣化が起きやすくなることが考えられるため、これが要因となって劣化状態に差が生じた可能性も考えられる。

最後に凝灰岩が用いられている墓所では小千谷の多くがB評価であるのに対して、松前ではC評価が最も多くD評価の割合も高いという結果になった。松前に関しては今回の調査地の中で劣化が最も激しく進行していた。凍結破壊注意日を見ると類似した傾向が出ているが、松前はより最低気温が低く、気温の振幅も大きくなるという傾向がみられる。気温差による違いとは考えにくいが一つの可能性として提示しておく。

3種類の岩石では劣化の傾向に差が生じることがわかったが、中でも凝灰岩が最も劣化が進行

していた。対して、花崗岩のものは劣化の進行が遅く、安山岩は条件によっては良好な状態で保存されていた。調査によって、凍結破壊注意日の出現回数も劣化の進行に影響する可能性を確認できた。

なお、今回は墓石の4面を東西南北面に分け調査をおこなったが、方位による劣化状態の差はほとんどみられなかった。このことから、劣化の進行速度には日照方向等の影響はなく、外気温が影響する部分が大きいと考えられる。

## V. おわりに

調査の結果、岩石の種類によって劣化の進行速度に差が生じることを確認した。また、凍結破壊注意日の出現回数が劣化状態に影響を及ぼす可能性も認められた。この結果から、石造文化財をより長く後世へ伝えていくためには用いられている岩石の種類の把握と、凍結破壊注意日の出現回数の把握をし、劣化の危険度を確認することが重要であると考えられる。

石造文化財を保存するには凍結破壊の大きな要因となる水分と急激な気温変化の予防が必要であることから、撥水剤を塗布して水分の侵入を防ぐ、樹脂含浸によって劣化が顕著な墓石を強化する等の対策が考えられるが、各地に何十基、何百基も存在する墓石を処理するには様々な問題が生じてくる。そのため、一度に多くの石造文化財を保護することができ、また、石造文化財そのものに直接手を加えることなく劣化の進行を遅らせることのできる、覆屋を利用することが最善策であると考えている。今後も引き続き全国各地の墓石の劣化調査をおこない、より良い保存方法を検討していきたい。

## 謝 辞

本稿の作成にあたって、奈良大学名誉教授西山要一先生、奈良大学教授魚島純一先生、奈良大学教授今津節生先生には様々な助言や御指導をいただきました。深く感謝の意を表します。

松前町教育委員会佐藤雄生氏、とうみょう幼稚園中村とし子氏にはご多忙中、調査協力や資料の提供をしていただきました。ここに深く感謝の意を表します。

奈良大学文学部文化財学科2年若林繁氏、元奈良大学文学部文化財学科保存科学ゼミ奥村亜未氏、奈良大学文学部文化財学科4年石倉優紀氏、奈良大学文学部文化財学科4年武井成実氏には調査補助をしていただきました。多大なるご協力ありがとうございました。また、論文作成にあたり助言や協力をしてくれた奈良大学大学院文学研究科文化財史科学専攻保存修復学ゼミの皆様にも感謝いたします。

他にもさまざまな方のご協力やご意見をいただき、本論文を仕上げることができました。ここに記して感謝の意を表します。

## 注

- 1) 東京国立文化財研究所 (1985) 『石造文化財の保存と修復』 東京国立文化財研究所
- 2) 三浦定俊・福田正巳 (1985) 「凍結－融解サイクル出現頻度の全国分布」 『石造文化財の保存と修復』 pp.33-39 東京国立文化財研究所
- 3) 村上重良 (1974) 『慰霊と招魂』 岩波書店
- 4) 長野栄俊 (2006) 「福井県における宗教関係公文書の史料学的考察 (その二)」 『若越郷土研究 第51巻1号』 pp.25-48 福井県郷土誌懇談会
- 5) 国立公文書館デジタルアーカイブ 『官修墳墓の維持管理及び祭祀について』
- 6) 今井昭彦 (2013) 『反政府戦没者の慰霊』
- 7) 江差町 (1983) 『江差町史第六巻 通説2』
- 8) 溝口敏磨 (2007) 「戊辰戦争の歴史記憶」 『新潟史学 第56号』 pp.26-55 新潟史学会
- 9) この史料は明治7年の内務省乙第二十二号達しを受けて作成された明細帳の写しだと考えられる。
- 10) 柏崎市史編さん委員会 (1986) 『柏崎市史資料集 近現代編1』
- 11) 高知県教育委員会ほか (1982) 『志士は今も生きている』
- 12) 墓域図には10月との記述があり、『柏崎市史資料集 近現代編1』には12月との記述がある。しかし明治元年10月3日に薩摩藩の田尻善左衛門善左衛門から祭祀料が下し置かれたという記述も確認できるため、いずれにしろ明治元年の10月以降には招魂所及び墓域の整備が始まっていたと考えられる。
- 13) 11)と同じ。
- 14) 立川昭二 (1981) 『日本人の病歴』
- 15) 関根達人編 『函館・江差の近世墓標と石造物』
- 16) 7)と同じ。
- 17) 三浦定俊、福田正巳 (1985) 「凍結－融解サイクル出現頻度の全国分布」 『石造文化財の保存と修復』

## 参考文献

- 1) 明田鉄男 (1986) 『幕末維新全殉難者名鑑2～4』 新人物往来社
- 2) 石崎武志・三浦定俊 (1997) 「石材の凍結劣化機構の基礎的研究」 『文化財保存修復学会第19回大会講演要旨集』 pp.98-99
- 3) 今井昭彦 (2005) 『近代日本と戦死者祭祀』 東洋書林
- 4) 今井昭彦 (2013) 『反政府戦没者の慰霊』 御茶の水書房
- 5) 今村あゆみ (2006) 「神葬祭から「招魂」へー京都東山霊明社における招魂の変遷ー」 『史泉 第103号』 pp.1-17 関西大学
- 6) 江差町 (1983) 『江差町史第六巻 通説2』 江差町
- 7) 小田康徳、他 (2006) 『陸軍墓地がかたる日本の戦争』 ミネルヴァ書房
- 8) 小千谷市史編修委員会 (1969) 『小千谷市史 上巻』 小千谷市
- 9) 柏崎市教育委員会 (1982) 『柏崎の文化財』 柏崎市教育委員会
- 10) 柏崎市史編さん委員会 (1986) 『柏崎市史資料集近現代編1』 柏崎市史編さん室
- 11) 高知県教育委員会 他 (1982) 『志士は今も生きている その墓所をたづねて』
- 12) 草間孝廣 (2005) 「箱館戦争の招魂祭儀と社人－江差招魂場の事例から－」 『神道宗教第199・200号』 pp.353-367 神道宗教学会

- 13) 国立歴史民俗博物館 (2003) 『国立歴史民俗博物館研究報告第102集「慰霊と墓」』国立歴史民俗博物館
- 14) 小坂肇 (1998) 「太政官期地方巡幸の基礎的研究」『法政史学 第50号』pp.62-72
- 15) 小林健三・照沼好文 (1969) 『招魂社成立史の研究』錦正社
- 16) 佐久間律堂 (1941) 『戊辰白河口戦争記』堀川古楓堂
- 17) 沢田正昭 (1997) 『文化財保存科学ノート』近未来社
- 18) 白河市 (2006) 『白河市史 第二巻 通説編 2 近世』白河市
- 19) 関根達人 (2010) 『近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究』「平成19年度～21年度 科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書」
- 20) 関根達人 (2013) 『函館・江差の近世墓標と石造物』「平成22年度～25年度 科学研究費補助金 中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究基盤研究(A) 研究成果報告書」
- 21) 高島孤月庵 (1918) 『箱館戦争と大野藩』私立図書館高島文庫
- 22) 高見雅三・石崎武志 (2012) 「旧日本郵船小樽支店の建築部材の劣化と保存対策」『保存科学 第51号』pp.77-94 東京文化財研究所
- 23) 立川昭二 (1981) 『日本人の病歴』中央公論社
- 24) 津田勉 (2002) 「幕末長州藩に於ける招魂社の発生」『神社本庁教学研究紀要 第7号』pp.127-173 神社本庁教学研究研究所
- 25) 東京国立文化財研究所 (1985) 『石造文化財の保存と修復』東京国立文化財研究所
- 26) 中西淳朗 (1994) 「「横浜軍陣病院」の再検討」『日本医史学雑誌 第40巻第1号』pp.5-9 日本医史学会
- 27) 中西淳朗 (1998) 「土佐藩足軽・岡本兵衛の戦病死をめぐって」『日本医史学雑誌 第44巻第1号』pp.151-152 日本医史学会
- 28) 中西淳朗 (1998) 「横浜軍陣病院における土佐・因州両藩の死者をめぐって」『日本医史学雑誌 第44巻第3号』pp.431-432 日本医史学会
- 29) 中西淳朗・松本龍二 (2003) 「西南戦役と神奈川県下の官修墓地」『日本医史学雑誌 第49巻第4号』pp.672-673 日本医史学会
- 30) 長野栄俊 (2006) 「福井県における宗教関係公文書の史料学的考察 (その二)」『若越郷土研究 第51巻1号』pp.25-48 福井県郷土誌懇談会
- 31) 中村武生 (2011) 「戦跡探訪幕末期の霊明舎と長州毛利家：東山招魂社成立の前史」『軍事史学 第47巻第3号』pp.145-149 錦正社
- 32) 中村昌道 (1978) 『明治戊辰戦役西軍墳墓志』
- 33) 永田富智 (2004) 『新撰組と松前』松前町史に親しむ会
- 34) 函館護国神社編 (1944) 『官修函館墳墓祭神調』
- 35) 溝口敏磨 (2007) 「戊辰戦争の歴史記憶」『新潟史学 第56号』pp.26-55 新潟史学会
- 36) 村上重良 (1974) 『慰霊と招魂』岩波書店
- 37) 茂木治 (2010) 『函館西部地区 2 山側部』
- 38) 脇哲 (1981) 『埋もれていた箱館戦争』みやま書房

## Summary

Stone cultural properties are often outdoors and there is therefore a danger of deterioration. Recently, the deterioration of the *Boshin* war gravestones has become serious. It is necessary to preserve them. I therefore evaluated the deterioration of the gravestones.

As a result of the investigation, the type of stone was found to be the cause of deterioration. Also, the number of days on the "frozen destruction caution day" was also affecting the deterioration.

**Key words** : Stone cultural property, gravestone, deterioration, *Boshin* war, war dead.